

カルチャー・クエストの実践と協働活動

— 英語圏の学生たちとの交流を手がかりに —

Collaboration in the CultureQuest Activity

村上郷子

MURAKAMI, Kyoko

1. はじめに

「カルチャー・クエスト(文化探究)」¹は、2002年、ニューヨーク市立大学学校開発センター (Center for School Development, City College of New York, U.S.A.) が開発した探究型学習 (inquiry-based learning) プロジェクトの名称である。日本においても、2003年「カルチャー・クエスト・ジャパン」を立ち上げ²、アメリカ合衆国をはじめ、インド、チリ、ドミニカ共和国、スペイン、スウェーデンなど世界各国にその輪を拡げている。

カルチャー・クエストでは、児童生徒たちが国内外の様々な文化的諸相の一つをテーマに取り上げ、そのテーマについて、グループをつくってインターネットや図書館、または人的資源を介した調べ学習、フィールドワークやインタビューなどを協働で行いながら探究学習を進めてゆく。最終的に、児童生徒たちのグループによる調査結果を動画やホームページ、パワーポイントなどの作品にまとめて、自分たちが発見した独自情報を世界に発信していくという情報発信型のプログラムである。

本題に入る前に、カルチャー・クエストの

3つの特徴についてみておこう。まず第1に、カルチャー・クエストは、探究に基づいた (inquiry-based) 文化探究のプロジェクトである。ここで気をつけたいのは、カルチャー・クエストは可能な限り実際に現地に向いてインタビューをしたりフィールドワークをしたり、実物を見たりさわったりすることによって、自己の内部で「文化」を身体化する。よって、単なる机上だけの調べ学習ではない。

第2に、カルチャー・クエストにおける教師の役割が挙げられる。カルチャー・クエストでは、教師はコーチであり熟練した学習者 (Teacher as coach and expert learner) として、子どもたちと共に学習する存在である。教師は、壇上の上から一方的に「文化」を伝達するのではなく、生徒たちのプロジェクトに共に参加し、時に助言をすることもあるが、状況によっては学習者として生徒たちから学ぶこともある。例えば、メディアの制作などは、場合によっては子どもたちの方が「熟練した学習者」になる場合もあろう。また、カルチャー・クエストに参加している児童生徒や教師は、いつでも日本文化の「熟練者」として海外の子どもたちや教育関係者とつながることも可能である。その意味では、カル

キーワード：カルチャー・クエスト、協働、探究学習、文化

Key words : CultureQuest, collaboration, inquiry-based learning, culture

チャー・クエストを実践するものは、「生涯学習者」であるともいえよう。

第3に、カルチャー・クエストはグループメンバーによる協働制作 (collaborative) を目的としたプロジェクトである。生徒たちは、グループ学習やグループディスカッションを通じて、「文化」についての多様な意見や見方があることを学ぶ。同時に、グループ内での様々な役割を分担・共有することによって、一つのプロジェクトを完成していく。また、生徒たちはカルチャー・クエストにおける協働制作の過程を通じて、自主性、協調性、コミュニケーションスキルなどを身につけることができる。このように、グループで協働制作を進めることにより、文化の多様性をもまた学ぶことができるのである。北米などでは、カルチャー・クエストのような探究型の学習において、重視される方法論の一つに、グループによる「コラボレーション (collaboration)」がある。

コラボレーションは、複数の学校関係者(児童生徒、教師、管理職、保護者など)が長いスパンで共通のプロジェクトに自分たちの役割を明確にして深く関わる形態を指す³。児童・生徒たちのグループ活動や学校関係者たちの協働学習・協働実践 (collaborative learning or collaborative work) とも重なる概念である。コラボレーションと似た概念として、協同 (cooperation) や協調 (coordination) があるが、基本的にはプロジェクトや集団間における構成員の介入の程度によって区別される。

コラボレーションは、一つのプロジェクトを協働で創りあげるため、個人の役割や目的意識は明確ではあるが、プロジェクトの成果はグループ全体の評価で個別評価はできない。一方、協同 (cooperation) ではプロジェク

トにおける個人評価が可能である。協調 (coordination) はコラボレーションと協同の中間でその関わり合いの程度 (例えば海外の児童・生徒との交流) によりいずれの形態もとりのる。コラボレーションに比べ「協同」は、短い期間の介入が中心で、通常は同じ目的や情報源を共有しておらず、共通の利害や状況に応じて協同活動を行う。「協調」はこれら二つの中間概念であるが、基本的に長い期間での介入があり、目的や情報源もある程度共有されている。

戦後日本におけるグループ学習の系譜は、小集団による協同学習 (後に信川実との「自発協同学習」(1965) を発表) を提唱した末吉悌次 (1959) や「自主的協同学習」の相沢保治 (1965) などが挙げられるが、上記の3つの分類上では、児童・生徒たちの長期間の介入プロジェクトを実践することが難しいことから、「協調」もしくは「協同」にとどまる場合が多い。

「カルチャー・クエスト」の実践はまだ始まったばかりで、試験的段階にすぎないが、現段階の課題として、(1)「自」文化や「他」文化、異文化の学びにコラボレーションをどのように盛りこむか、(2)文化探究におけるコラボレーションの過程でICTをどのように活用していくべきか、(3)コラボレーションの前提となるさまざまな形のコミュニケーションをどのように取り込むのか、などが挙げられよう。

そこで小論では、上記の3点の課題を念頭に置き、2007年度H大学「情報教育論」の授業で行ったカルチャー・クエストの実践を、グループ活動における協働、または「コラボレーション」の概念を中心に、グループ活動の達成度や問題点などの分析を進める。

当該授業では、現地調査を兼ねたカルチャー・クエストやアメリカ合衆国の大学生（テキサス州、カンサス州）とインターネットを介した交流を行った。次に、カルチャー・クエストの実践の概要に簡単に触れておこう。

2. カルチャー・クエスト実践の概要

カルチャー・クエストで探究する文化とは何だろうか。カルチャー・クエストでは、文化を「生活の方法」と考える。文化を生活の方法であると定義しても、具体的にどのようなものなのかはイメージしにくい。そこで、授業で行ったカルチャー・クエストの実践を提示する前に、具体的な「文化の諸相」とはどのようなものがあるのか考えてみることは無駄ではない。例を挙げておこう⁴。

表1に挙げたものはほんの一例である。カルチャー・クエストは、ある文化の諸相から任意のひとつを選択し、生徒たちが自分たちのたてた問いに、自分なりの答えを見つけるために探究学習をする。例えば、食材ひとつをとっても、インドのカレーと日本のカレーは異なる。また、タブーも地理的文化的条件で異なる場合もあれば共通点もあるだろう。生徒たちは、ひとつの「文化」を深く探究することにより、「文化」は決して一枚岩ではないことを体験的に学習するのだ。なお、カルチャー・クエストに関する「文化」概念についての考察は村上(2007)⁵を参照されたい。

筆者は、2007年度（前期・後期）H大学で開講された「情報教育論」を担当し、カルチャー・クエストの実践を行った。当該授業の前期は「自」文化や「他」文化についての講義やグループ活動を中心に授業を進め、後期はアメリカ合衆国の2つの大学の学生たちと交流も行った。授業では、一年を通じて自文化についてグループによる探究学習を協働で行い、最終的にはNOTAというお絵かきソフトを使ったホームページや動画、パワーポイントなどの作品にまとめ、海外の学生たちに発信した。ホームページやパワーポイントによる作品の使用言語は英語である。また、この授業は実験的な意味合いもあり、二人の教員と1人のTA（教員補佐）がチームをつくり、2つの授業で同じカルチャー・クエストの実践を行った。

学生たちが選択したカルチャー・クエストのテーマは、築地、駄菓子、神楽坂、カレーのいろいろ、ゴールデン街、秋葉原、花火など多岐にわたる。実際に築地や駄菓子屋さんなどにグループで現地取材をしたりインタビューをしながら、身近な自文化を体感し、相対化していく。その過程で、インタビューをする人やインタビューの様子を録音・録画（許可ありの場合）する人など、それぞれのグループで役割を分担し、現場から得た生情報をさらにグループで加工し、一つの作品を創りあげていった。授業では、このようなカ

表1 文化の諸相例

文化の諸相	
価値、態度、通念及び・又は行為	宗教、宗教的信仰及び儀式
儀式、祝日、タブー	服装の様式、装い
食べ物、食材、食事の準備	音楽、芸術、工芸、ダンス及び演劇
文学、神話、民話	日常生活
教育と学校	仕事・勉強と生計

ルチャー・クエストの実践と同時に、2つの大学の学生たちともインターネットを介した交流を行った。

1つ目の交流相手は、テキサス大学ダラス校で「日本文化」という科目を履修している学生（約45名）である。期間は、2007年10月の第2週から3週目にかけて集中的に行い、11月上旬頃まで続けた。交流の方法は、テキサス大学ダラス校の学生たちが日本文化に関する質問をH大学の学生に送り、H大学の学生がその質問に答えるというものである。

質問のやり取りには、カルチャー・クエスト（CQ）コモンズという情報共有システム⁶内の自動翻訳掲示板を活用した。また当該授業では、英文学専攻の院生がTAとして海外の学生たちとのやり取りをサポートしてくれた。

質問の形式は、相手側からの簡単な自己紹介があり、続いてあるテーマに関する質問が5～10点くらいあった。質問のテーマには、歌舞伎、能、相撲といった日本の伝統文化とされるものから、京都料理、麺類（そば・うどんなど）、酒、懐石料理などの食文化、盆踊り、カラオケ、ゴールデン・ウィーク、元旦など日本の生活・風俗に関するもの、またはアニメ、野球、ファッション、犯罪、車、女性問題など多岐にわたった。質問の英語は、できるだけ短く分かりやすいことばで書いてもらったが、質問の内容はすぐに答えられるものから、意見・異見を問うものまで様々であり、質問によっては答えることが難しい質問もあった。同年代の学生とはいえ、異なる文化的背景をもった学生からの質問には、学生たちいろいろ学んだようである。例えばある学生は、「日本人には聞かれたことのない質問が飛んでくるのである意味新鮮でそこ突い

てくるかって感じですよ」というコメントをしている。

2つ目の交流相手は、カンサス州にあるハスケル・インディアン・ネーション大学（Haskell Indian Nations University）で教育学を専攻している学生（13名）である。この大学は、連邦政府の資金によって運営されている大学であり、入学が許可される学生は家系を代々さかのぼって、最低でも4分の1アメリカ合衆国の先住民民族であるインディアンの子孫であることが証明されなければならない。「文化」をテーマにするには、いろいろな意味で示唆を与えてくれる交流相手であろう。ハスケル大学の学生たちとは、主に「NOTA」というお絵かきソフトを使って、画像を介した自己紹介をしながら交流を進めた。もちろん、「NOTA」を使う際にも自動翻訳掲示板を使いながら交流を進めた。期間は、11月の第2週から12月の第2週目までの間で行った。

これまで、カルチャー・クエストの実践の検証では、英語に接する機会の頻度によって国際交流や求める教育内容、テーマに違いがあるかについての定量的分析をおこなった⁷。しかし、カルチャー・クエストの重要な要素であるグループによる協働活動の教育効果についての分析はしてこなかった。そこで今回は、海外の学生と英語を介した交流活動をグループで行う場合、英語に接する機会が多い学生とそうではない学生との間にどのような違いがあるかを分析する。同時に、グループによる文化探究やアメリカの大学生との交流についての質的分析も合わせて行う。

3. 結果と考察

小論では、英語を使ったグループによる協

働活動において、英語に接する機会の頻度によってグループによる協働活動の達成度やグループによる協働活動がうまくいく要因・うまくいかない要因などに違いがあるかを調査した。そのため、2007年度（前期・後期、2クラス）H大学で開講された「情報教育論」を履修している学生に、カルチャー・クエストの実践に関するアンケート調査を行った。アンケートの実施期間は2007年12月18日から2008年1月20日の間であり、有効回答数は2つのクラスで33人であった。アンケートの回答者33人中、2年生が13名（39.4%）、3年生が20名（60.6%）であり、男性は14名（42.4%）、女性は19名（57.6%）であった。この調査では、学生たちにカルチャー・クエストのグループウェアを使ったアンケートへ記入・選択してもらった。

授業では海外の大学生との交流で使う言語が英語であったため、ことばによる問題点を解決する一助として、自動翻訳掲示板を併用しながら進めていった。当該授業は英語の授業ではないため、実際の英語力を問うというよりは、授業以外の日常生活においてどれくらいの頻度で英語に接しているのかを問うた。その結果、ほぼ毎日何らかの機会がある者は12名（26.7%）、週2～3回くらいが7名（15.6%）、1～2週間に1回くらいが7名（15.6%）、1～

2ヶ月に1回くらいが7名（15.6%）、そして機会が全く・ほとんどない者は12名（26.7%）であった。

本稿では、グループによる英語を使った協働活動をする際、英語に接する機会の多寡によって、(1)グループによる協働活動の達成度、(2)グループによる協働活動のうまくいった要因、(3)グループによる協働活動のうまくいかなかった要因、などに違いがあるかを分析する。この調査を行う上での仮定は、「英語を介した学生同士の協働活動においては、英語に接する機会が多いグループほど協働活動の達成度が高い」ということで、この仮定が当てはまるかどうかを調べる。

また上記の3点については、便宜的に英語に接する機会がほぼ毎日ある、もしくは週2～3回以上あると回答したケースを「高頻度」、1～2週間に1回から機会が全く・ほとんどないケースまでを「低頻度」グループとに分けた。すると、「高頻度」のグループは19名（42.2%）、「低頻度」のグループは26名（57.8%）であった（表2参照）。

(1) 英語に接する頻度とグループによる協働活動の達成度について

まず、グループによる協働活動の達成度について調べるため、該当授業で行ったアン

表2 英語に接する機会の頻度

	回答小計 (%)	回答合計 (%)	グルーピング
ほぼ毎日何らかの機会あり	7 (21.2%)	13 (39.4%)	高頻度
週2～3回くらい	6 (18.2%)		
1～2週間に1回くらい	5 (15.2%)	20 (60.6%)	低頻度
1～2ヶ月に1回くらい	5 (15.2%)		
機会が全く・ほとんどない	10 (30.3%)		

ケート調査で、「グループによる協働作業はうまくいきましたか」という問いに5つの回答を用意した（図1参照）。

回答の結果は、「うまくいった」が5件（15.2%）、「どちらかといえばうまくいった」が22件（66.7%）、「どちらかといえばうまくいっていない」が5件（15.2%）、「うまくいっていない」が1件（3.0%）であった。「グループ学習に参加していない」という回答も用意したが、これに該当する者はいなかったため、この回答の選択肢は分析では外した。全体的には、「うまくいった」・「どちらかといえばうまくいった」という回答が8割以上（81.9%）を占める結果となった。

次に当該授業では、グループによる協働活動の作品や海外の学生との交流では、英語を使用し、英語に接する機会が多いか少ないかによって、英語を介したグループによる協働活動の達成度について違いがあるかどうかを

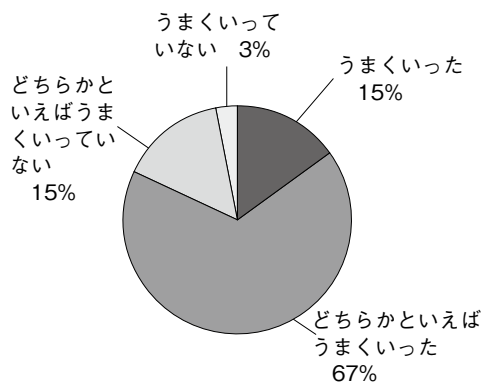


図1 グループの協働活動

調べた（表3参照）。その結果、グループによる協働活動では、「低頻度」のグループの方が「高頻度」のグループよりも若干「うまくいった・どちらかといえばうまくいった」と答えた割合が多かった。有効回答数が少ないため、「高頻度」のグループと「低頻度」のグループの差を検定しなかったが、この結果から、「英語を介した学生同士の協働作業においては、英語に接する機会が多い学生のグループほど協働活動への満足度が高い」という仮定は当てはまらず、むしろ英語に接する頻度の高いグループの方が、協働活動は「どちらかといえばうまくいっていない」と答える傾向があるということが分かった。

それでは、具体的に「うまくいった・どちらかといえばうまくいった」と回答したのはどのような理由からかみてみよう。

「インタビューからプレゼンまでグループでの作業が、協力してひとつのものを作りあげたという達成感をととても感じられました。グループの中の人とはとてもよい交友関係を築けました。」（Tさん、低頻度グループ）

「授業を通し、自分が成長できてる気がしました。グループでの作業なので、協調性も養われ、良かったと思います。」（Sさん、低頻度グループ）

これらはアンケートの回答の一部であるが、学生たちがグループをつくって協働で一つの作品を創りあげたということは、グループの

表3 グループによる協働活動について

	高頻度	低頻度
うまくいった	2 (15.4%)	3 (15.0%)
どちらかといえばうまくいった	7 (53.8%)	15 (75.0%)
どちらかといえばうまくいっていない	4 (30.8%)	1 (5.0%)
うまくいっていない	0 (0.0%)	1 (5.0%)

メンバーとの連帯感や結束も深まり、達成感を感じたという好例であろう。

また英語に接する機会の頻度にかかわらず、グループ活動がうまくいかない理由にあげられたのは、現地調査をする際、班員同士の日程がなかなか合わないということや、時間のなさがあげられた。例えば、

「現代人は忙しく、4人のスケジュールを合わせて、協力する時間を作ることが大変でした。分担したり、おんぶしてしまったり、あまりグループで協働できませんでした。」(Kさん、低頻度グループ)

「週一の授業というところが、チームの連携にとって大きな難関だったと思います。ゼミならまだしも、なかなか限られた時間の中でのスケジュールリングや意見交換は深められないものでした。」(Tさん、高頻度グループ)

時間の制約がある中での活動であるが、英語に接する頻度にかかわらず授業以外での日程調整は難しいようであった。これは、授業以外の時間を使った現地取材やインタビューなどのグループによる協働活動を進めていく上で、避けられない問題の好例である。いかに学生のモチベーションを高めていくかが、今後の課題になる。

(2) 英語に接する頻度と協働活動がうまくいった要因について

グループ学習における協働活動を促進する要因を調べるため、協働活動が「うまくいった」要因として、「良いリーダーや調整役がいた」、「メールや掲示板をうまく活用できた」、「NOTAを使った協働作業がうまくできた」、「教員やTAのサポートがあった」、「グループメンバーのやる気があった」といった選択肢

を用意し、その回答を得た。

グループ学習による協働活動については、8割以上の回答者が「うまくいった・どちらかといえばうまくいった」と答えたわけであるが、うまくいった要因を調査するため、アンケートでは「グループ学習による協働作業が、うまくいった・どちらかといえばうまくいった点は次のどれですか」という質問をした⁸。その回答では、14件中4割以上の回答者(42.4%)が「グループメンバーに良いリーダーや調整役がいた」ことが協働活動のうまくいった理由として挙げた。続いて、「NOTAを使った協働作業がうまくできた」が9件(27.3%)、「グループメンバーに十分なやる気があった」が7件(21.2%)、「メールやCQコモンズの掲示板を活用したコミュニケーションがうまくできた」が2件(6.1%)、「教員やTAが適切なサポートやアドバイスをした」が1件(3.0%)、という結果であった(図2参照)。

それでは、グループ学習での協働活動を促進する要因に、英語に接する頻度による違いがあるのだろうか。この問いに答えるため、

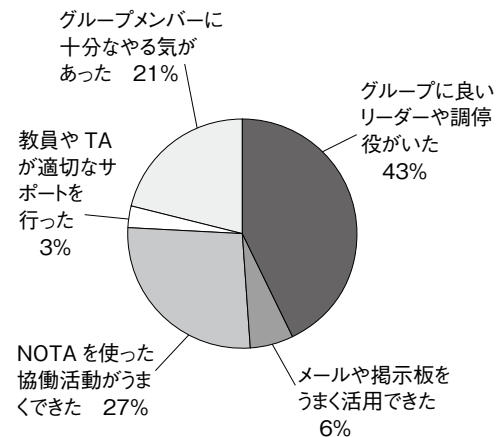


図2 協働活動がうまくいった理由

表4 グループによる協働活動がうまくいった要因

	高頻度	低頻度
グループに良いリーダーや調停役がいた	6 (46.2%)	8 (40.0%)
メールや掲示板をうまく活用できた	1 (7.7%)	1 (5.0%)
NOTAを使った協働作業がうまくできた	2 (15.4%)	7 (35.0%)
教員やTAが適切なサポートやアドバイスをした	1 (7.7%)	0 (0.0%)
グループメンバーに十分なやる気があった	3 (23.1%)	4 (20.0%)

英語に接する頻度別に、協働活動が「うまくいった・どちらかといえばうまくいった」という要因は何かを調査した。その結果、英語への接触頻度にかかわらず、良いリーダーや調停役がいたかどうか協働活動をうまく遂行する第1の要因であることがわかった。この傾向は「高頻度」のグループの方で、その他の要因に比べ幾分高い傾向がみられる。また、第2の要因として「低頻度」のグループでは、「NOTAを使った協働作業がうまくできた」を挙げているが、「高頻度」のグループは、「グループメンバーのやる気」を2番目の要因として選択した。3番目の要因としては、「高頻度」のグループは「NOTA」を、「低頻度」のグループでは「メンバーのやる気」をあげ、2番目と3番目の要因が逆転する結果となった（表4参照）。

この結果から言えることは、回答者数が少ないことから英語に接する頻度による大きな違いがあるとは言い切れないが、いずれのグループでも協働活動の成功要因として、グループを引っばるリーダーや調停役の存在やメンバーのやる気があることが重要であるといえる。また「低頻度」のグループに関しては、「NOTAを使った協働作業がうまくできた」ことも成功要因の一つといえよう。

学生たちのグループによる協働活動について、具体的にどのような点がよかったのか、アンケートの回答から拾ってみよう。

「異文化を調べるということで、自分だけでは絶対に行くことのない場所やお店に足を踏み入れることができ、世界が広がったような気がする。」（Yさん、低頻度グループ）

「インタビューに行ったのが面白かったです。教室で学ぶだけではわからないことがあり、実際に行って聞いてみる必要性を感じました。」（Tさん、高頻度グループ）

「なかなかできない築地の取材に、授業の名目で行けたのが面白かったというより貴重な経験ができてよかったです。」（Hさん、低頻度グループ）

英語に接する頻度にかかわらず、かなりの学生がグループによるフィールドワークを「面白かったことやよかったこと」としてあげていた。調べてきたことやインタビューの内容を英語で書くといういささかハードルの高い要求を出したが、限られた時間の中においてもグループをつくってフィールドに出て行き、現場取材やインタビューを行いながら、一つの作品を協働で創りあげていくことは学生たちにとっても印象深い活動であったようである。

またグループをつくる際、できる限り多様な（といっても同じ大学の学生なので限界はあるが）人たちと組ませるようにしている。協働（コラボレーション）とは、できる限り異分野の人たちがチームをつくって何かしらのものや作品をつくっていくことが求められ

るからである。その意味で次の回答者のコメントは示唆に富む：

「グループに関しては、最初、仲良しな友人と一緒にいいと思っていただけ、学年・男女関係なく無差別で作られたためいろいろな子と話ができ非常に楽しかったです。これはかなり正解です!!」(Sさん、低頻度グループ)

もちろん、海外の学生との交流についても多くの学生がコメントを載せていたが、本論からはずれるので本稿では割愛する。ここでいえることは、協働活動がうまくいく要因として、「良いリーダーや調整役」、「NOTAを使った協働作業」、「グループメンバーのやる気」が挙げられた。この結果から、協働活動(例えば、フィールド・ワークや海外の学生との交流など)への動機付けがカギになるのではなかろうか。

(3) 英語に接する頻度と協働活動がうまくいかなかった要因について

最後に、グループ学習による協働活動が「どちらかといえばうまくいっていない・うまくいっていない」理由を調べるため、「グループ学習による協働作業が、うまくいかなかった、どちらかといえばうまくいかなかった点は何ですか」という質問をアンケートで行った。

一番多かった選択肢は、「メールやCQコメントの掲示板を活用できなかった」が19件

(57.6%)であり、実に6割近い回答者が選択した。次は、「グループメンバーに良いリーダーや調整役がいなかった」と「グループメンバーに十分なやる気がなかった」がそれぞれ5件(15.2%)であり、「教員やTAが適切なサポートをしなかった」が3件(9.1%)、「NOTAを使った協働作業がうまくできなかった」が1件(3.0%)と続いた(図3参照)。

次に、英語に接する頻度とグループ学習による協働活動が「うまくいかない」抑制要因の関係について調べてみた(表5参照)。その結果では、英語に接する頻度によって多少の違いがみられた。まず、共通点として、いずれのグループでも「メールや掲示板を活用できなかった」ことが、グループ活動がうまく

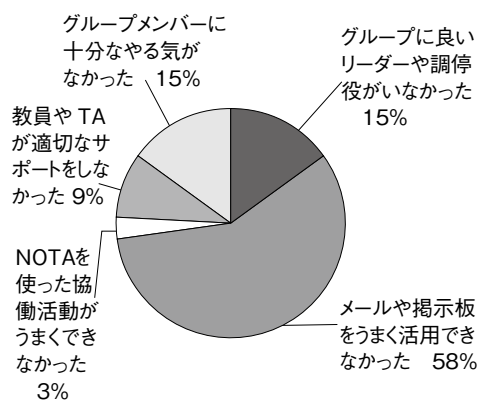


図3 協働活動がうまくいかなかった理由

表5 グループによる協働活動がうまくいかなかった要因

	高頻度	低頻度
グループに良いリーダーや調整役がいなかった	3 (23.1%)	2 (10.0%)
メールや掲示板をうまく活用できなかった	7 (53.8%)	12 (60.0%)
NOTAを使った協働作業がうまくできなかった	1 (7.7%)	0 (0.0%)
教員やTAが適切なサポートをしなかった	0 (0.0%)	3 (15.0%)
グループメンバーに十分なやる気がなかった	2 (15.4%)	3 (15.0%)

くいかなかった要因に挙げられているが、その傾向は「低頻度」のグループで幾分高い。「教員やTAが適切なサポートやアドバイスをしなかった」ことを協働活動がうまくいかない原因に挙げたのは、「低頻度」のグループのみであった。「良いリーダーや調停役がない」または「グループメンバーに十分なやる気がない」という項目については、いずれのグループも同程度であった。

この調査結果から、英語を介したグループによる協働学習においては、やはり英語の問題がカギになろう。「高頻度」「低頻度」のいずれのグループでも「メールや掲示板を活用できなかった」ことが、グループ活動がうまくいかなかった要因にあげているということは、裏を返せばどちらのグループでも英語に対する苦手意識が働いているということが推測できるからである⁹。また、「教員やTAが適切なサポートをしなかった」という回答が、「低頻度」のグループであげられているが、ニーズのあるところにより多くのサポートが必要であるといえる。

同時に、本研究で採用している自動翻訳ソフト（高電社、日-英/英-日）の限界も明らかになった。自動翻訳掲示板については、「自動翻訳掲示板の使い勝手はどうでしたか」という質問をしたところ、回答結果は、「良い」が1件（3.0%）、「どちらかといえば良い」が17件（51.5%）、「どちらかといえば悪い」が8件（24.2%）、「悪い」が4件（12.1%）、「翻訳掲示板を使わなかった」が3件（9.0%）であった。そのため、使い勝手自体には半数以上の回答者「良い・どちらかといえば良い」としているが、「自動翻訳掲示板の翻訳のレベル（英訳・日本語訳）を評価してください」という質問には、逆の評価であった。

その内訳は、「非常に良い・使える」が0件、「良い・まあまあ使える」が11件（33.3%）、「どちらかという悪い・あまり使えない」が14件（42.4%）、「悪い・使えない」が4件（12.1%）、「使っていないので分からない」が4件（12.1%）であった。つまり、翻訳ソフトの質の問題になると、3分の2の回答者が「（どちらかという）悪い・あまり使えない」もしくは「使っていないので分からない」という評価であった。

自動翻訳ソフトについては、たとえば主語と動詞を省かない、単文にする、具体例を挙げる、カタカナ英語は使わない、または日本語から英語に翻訳された文章を、今度は英語から日本語に翻訳し直してみるなど、使い方には注意点をあげてきたが、現段階では、いろいろ問題はあっても「それでもないよりまし」というのが現状であろう。

グループによる協働活動がうまくいかない要因について、今度は学生たちのアンケートからみてみよう。大きくは3点ある。第1に、前出したことであるが授業以外でのフィールド・ワークにおける班員の日程調整があげられる。授業以外にもさまざまな活動をしている学生たちにとって、3～4人の日程と相手方の日程をすりあわせていくのはかなり厳しい現状があることが分かる。人数をできる限り少なくする、または最初から厳しい日程調整であることを自覚してもらうなどの対応が必要であろう。

第2に、当該授業は「通年」の授業ではなく「前期」・「後期」と分かれている。履修する学生には必ず「通年」で取るように周知したが、それでも脱落する学生もおり、前期から頑張ってくれた学生には残念なケースもあった。例えば、以下の例である。

「今年の4月からの授業を通じて困ったことは、前期・後期、通年で履修するはずにもかかわらず、後期になり、班員が欠けてしまい、せっかく創り上げていた活動が班崩壊により、台無しになってしまいました。」(Sさん、高頻度グループ)

これに類似したコメントは、複数見受けられた。確かに、授業以外の活動や英語での文章作成、新しいソフト(映像処理用のソフトのAdobe Premiere/Photoshop ElementsやNOTAなど)の使い方など、盛り込みすぎとのコメントもいただいた。

「少ない授業数で先生の要求していることが少し難しすぎるのではないかと思います。カルチャークエストをあまり理解しないまま、PC技術をあまりもちあわせないまま、授業外に時間をとってフィールドワーク、ミーティングをしたため、内容がしっかりしていなかったと思います。それも班員のやる気によるのですが…」(Hさん、低頻度グループ)

本授業は、カルチャー・クエストの実践ということで試験的な要素が多かったが、アンケートの結果を量的・質的に分析することによって、さまざまな課題が見えてきた。

まとめ

この小論では、「英語に接する機会の頻度によって、英語を使った協働活動に留意すべき違いがあるか」、という問いを立てた。本調査結果による結論では、英語に接する機会が高いグループとそうではないグループとの間の大きな違いはみられなかった。

英語に接する頻度とグループ学習による協働活動の関連について言えることは、グルー

プによる協働活動がうまくいった・うまくいかなかった要因には、英語に接する頻度による大きな違いは見あたらなかったということである。いずれのグループも、協働活動がうまくいった第1の要因は良いリーダーや調停役がいたかどうかを挙げており、うまくいかなかった第1の要因として、どのグループでも「メールや掲示板を活用できなかった」ことを指摘している。今回の結果では、回答者が33名しかいないという、統計上の限界もある。

しかし、このような調査結果には心にとめておきたい留意点がある。本調査の該当授業では、海外の学生との交流にあたり、自動翻訳掲示板や英語のできるTAが配置されており、ある程度のサポート体制が整っていた。このようなサポート体制の整備がどの程度、海外の学生との交流の手助けになっていたかは、今後調査を進めなければならないが、海外の学生との双方向の活動や交流には、ある一定のサポート体制や時間の確保を含めた環境整備が必要なことはいうまでもない。

細部の分析から、英語に接する頻度による若干の違いについて言えることは3点ある。第1に、実際の「交流」にあたっての物理的要因(例えば十分な時間の確保)や自動翻訳掲示板の機能上の不備が、とりわけ英語に接する機会の少ないグループにより多くの影響を及ぼすのではないかと推測される。

第2に、協働活動が「(どちらかといえば)うまくいた」理由として、英語に接する頻度が低くなるほど「NOTAを使った協働作業がうまくできた」点を挙げている。この結果は、いずれのグループも、「メールや掲示板を活用できた」という項目を選択していないこと合わせて考える必要があるだろう。つまり、NOTA

もメールや掲示板も協働作業を行う「過程」の部分であるが、NOTAがさまざまな視覚に訴えるお絵かきソフトであることから、英語を使う頻度も、文字のみのメールやCQコモন্ズの掲示板と比べると幾分下がってくる。このことから、いわゆる「英語」に対する苦手意識が協働作業の抑制要因にならなかったのではないかと考えることもできよう。いずれにせよ、「低頻度」のグループには、文字のみを介した協働活動や交流にしない配慮が必要になってこよう。

最後に、結果として全てのグループで協働活動が「(どちらかといえば) うまくいかなかった」理由として、「メールや掲示板を活用できなかった」という項目を選択しているが、その傾向は英語に接する頻度が低いグループほど高い傾向があった。やはり文字のみのメールやCQコモন্ズの掲示板では、よほど高いモチベーションがなければ難しい面もあるのかもしれない。

また、協働活動がうまくいかない理由として、「低頻度」のグループのみが「教員やTAが適切なサポートやアドバイスをしなかった」点を挙げていることから、英語を使った交流における協働活動においては、英語に接する頻度が低いグループに、より直接的なサポートや作業の内容の工夫が必要となろう。

異文化理解や国際交流などの実践では、環境問題など実際に国際社会が直面している問題や異なる文化や風習などを教材化して、それ自体の学習を「目的」とするものと国際社会で必要とされるコミュニケーション能力や表現力、共感性など個人的資質の育成を「手段」とするものの二つのアプローチがある¹⁰。学生は、英語に対する苦手意識を持ってはいても、異なる文化を持つ海外の学生との双方

向の交流や学生に共通する話題などには強い関心を持っていることも分かっている。そこで、さまざまなテーマを通じた異文化や「自」文化の理解を深めながら、単なる「道具」としての英語ではなく、表現や共感を含めたコミュニケーションの段階まで持っていくための工夫が、英語の苦手意識を克服するために必要になってこよう。

以上、小論では大学生のアンケート調査を通じて、英語に接する頻度と海外の学生・生徒との交流や協働活動に留意する点を考察してきた。カルチャー・クエストの実践はまだまだ試験的な域を出ていないが、発達段階の違いがあっても、小・中・高等学校の児童・生徒から大学生や社会人まで幅広く取り組みが可能なプログラムでもある。

今後の課題として、国際交流を進めて行くための支援とその教育効果においても具体的な実践例を介した検証が必要になろう。

注

本研究論文は、平成20年度科学研究費補助金基盤(B)、研究課題「国際文化探究学習のためのコミュニケーション・マネジメント・システムの研究」(課題番号 19300286) の研究成果の一部である。

- 1 カルチャー・クエストの概要については、坂本旬「『カルチャー・クエスト』の理論と実践-ニューヨーク市における新たな探求型文化学習プロジェクト-」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』第1号、2004年、105-128頁、カルチャー・クエストジャパン (<http://cq.i.hosei.ac.jp/>) 及びカルチャー・クエストUS (<http://www.culturequest.us/>) のホームページ参照。
- 2 筆者は「カルチャー・クエスト・ジャパン」の事務局を務める。
- 3 Winer, Michael & Ray, Karen, "Collaboration

handbook : creating, sustaining, and enjoying the journey” Saint Paul, Minn. : Amherst H. Wilder Foundation, 1994

- 4 オリジナル文書は、次のサイトを参照：

http://www.culturequest.us/pt_a1.htm

(カルチャー・クエストUS)。

- 5 村上郷子「国際理解教育と文化の概念－『カルチャー・クエスト（文化探究学習）』の『文化』概念を手がかりに－」平成18年度文部科学省科学研究費基盤研究（C）研究成果報告書（研究論文）、2007年3月、pp.35-46参照。

- 6 国立情報学研究所が開発を行っている「NetCommons」をベースに、カルチャー・クエスト用に構築・運用を行ったものである。詳しい内容は、菅原真悟主著「グループ学習を支援する情報共有システムの運用に関する考察－法政大学図書館司書課程e-learningシステム「HULiC」の利用調査から－」、法政大学教職資格課程年報、Vol. 5、2007年度を参照。

- 7 村上郷子「英語に接する頻度と英語を使った交流に関する一考察」、法政大学教職資格課程年報、VOL. 5、2008年3月、79-94頁。

- 8 「質問9」および「質問10」については、複数回答を予定していたが「CQCommons」のアンケート作成機能設定のミスのためひとつの回答のみになった。また、「質問19」のオリジナルの質問は、「グループ学習による協働作業が、うまくいった、どちらかといえばうまくいったと答えた人に聞きます。それはなぜですか。（複数回答可）」であり、「質問20」のもともとの質問は、「グループ学習による協働作業が、うまくいかなかった、どちらかといえばうまくいかなかったと答えた人に聞きます。それはなぜですか。（複数回答可）」である。しかしアンケート作成機能の設定ミスの為、結果として回答者は、グループ学習による協働作業の評価を問わず「質問9」および「質問10」の両方の質問の選択肢からそれぞれ1つずつ選択しなければ次の質問に移れないため、本文での質問内容には実情に合うように若干の修正を加えた。

- 9 英語を介した国際交流に関わる分析は発表済み。
村上郷子「英語に接する頻度と英語を使った交流

に関する一考察」参照。

- 10 佐藤郡衛『国際理解教育－多文化共生社会の学校づくり』明石書店、2001年。